淨土

八月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可　（毎月一回一日發行）
昭和十九年七月廿日印刷納本・昭和十九年八月一日發行
第十卷　第八號

安西覺承著
法然上人の和歌
B6版六十四頁　定價五十錢　送料六錢
上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺德の結晶をみる。

增谷文雄著
行誡上人
B6版二百三十頁　定價一圓五十錢　送料十二錢
近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脫俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

林靈法著
法然上人を憶ふ
B6版四四〇頁　實費三圓（送料共）
著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の內に法然上人の敎義をつゞつた。

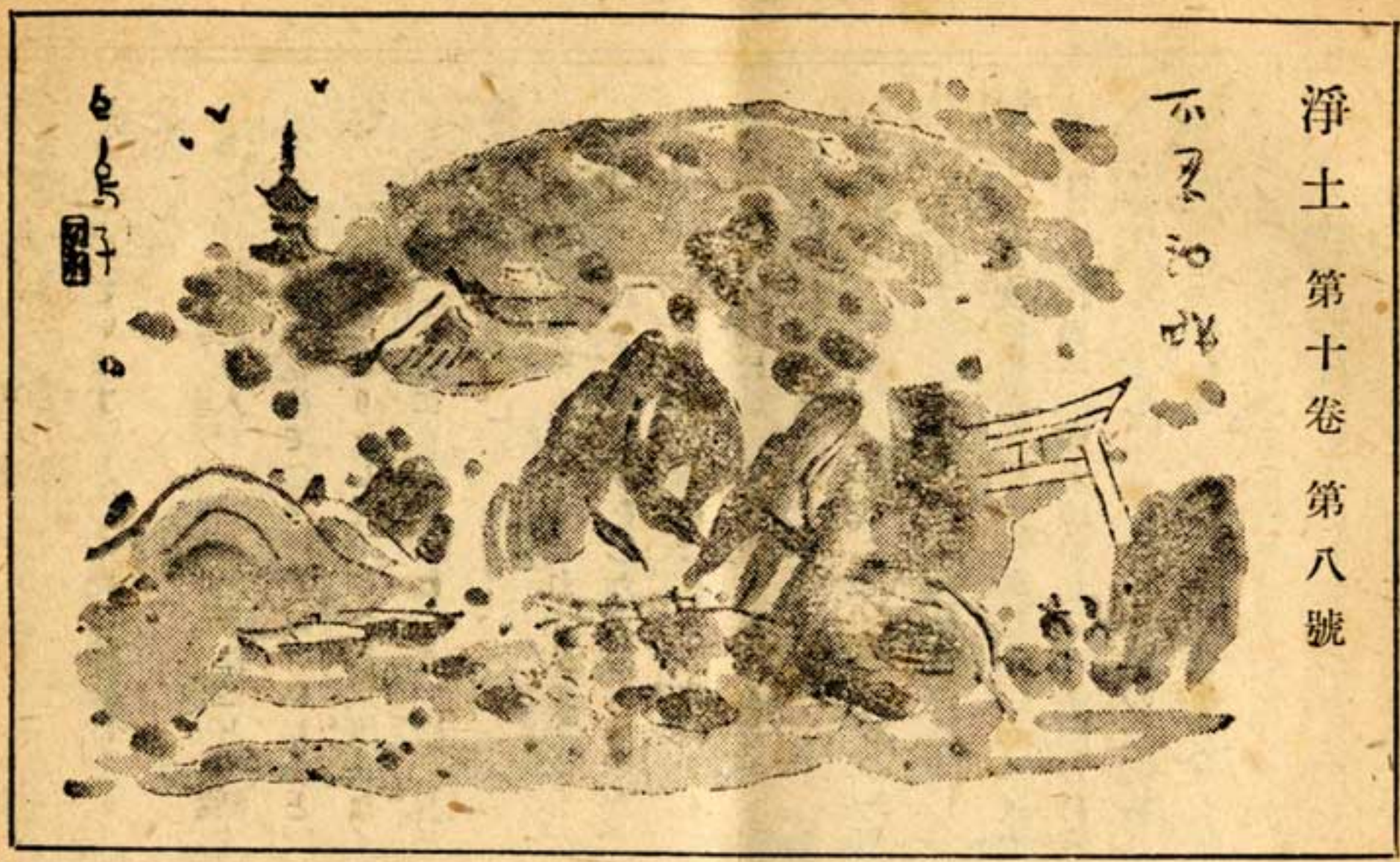
（本會で取次ぎます）

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢增○

淨土八月號目次

表紙・卷頭カット……月岡榮吉

ラマ教の明日……貴司山治…（八）
一人の精神力……吉田絃二郎…（一）
遺族感話　涙の蕾……金田明進…（三）
京都雜記　法然院……齋藤弔花…（四）
紀南竹枝……佐藤春夫…（六）
支那人の一斷面……岩野喜久代…（一一）
荒廢の佛だるま……成田有恒…（六）
信仰相談……（一四）
俳壇……太田耳動子選…（五）
法語解說　一切を委せて……中村辨康…（一五）
編輯後記……（一八）



浄土　第十卷　第八號

一人の精神力

吉田紘二郎

今年は筍の收穫も多く、初めて試みた麥の收穫も豫想以上であつた。梅も昨年の三倍以上は結果し、方々の友人に分けてやつて、ひどくよろこばれた。梅の下には自然生の紫蘇が密生してゐるので、これもやがてみんなに分けて上げることができる。つくづく大地の惠みといふものをありがたく思ふ。この秋は何卒澁柿がたくさん結果してくれるやうにと念じてゐる。平和の時代には甘柿のみが大切にされたものだが、このころは澁柿の方が、いつまでも保存が利くので重寶である。人間もこれと同じことで、天下泰平のをりは役に立ちさうに見えてゐて、いざといふ場合になつて存外役に立たなくなる人もあり、平常は澁柿のやうに疎んじられてゐる人で、いざといふ場合には、立派な仕事をやつてくれる人もある。

今日の日本は開闢以來の大國難に直面してゐる。誰れも彼れも迷ふ心に陷り易い。無理もないことである。しかし、今こそかねての心の修養を生かすべき時である。多年兵を養ふは一日の爲めである。わたくしどもが多年心の修養を怠らなかつたのは、今日の爲めであつた筈である。

楠公の話として傳はつてゐる物語がある。

或る人が楠公に向つて、「わたくしは敵の中に斬り入りましたが、眼が

眩んで、何も彼も眞つ暗になつて、たゞ夢中に斬りまくつたものでございます」と語つた。楠公はその人に對してかう答へた。

「あなたは正直な人だ。ほんたうなことを話す人だ。實をいふとわたしも初めての合戰には、あなたと同じやうに、眼先が眞つ暗になりました。しかし幾度となく戰場に出てゐる間には、戰さにも馴れ、はつきり敵を見ることができるやうになります。」

麻利支天の再來とまでいはれた大楠公にして、なほ初陣には眼が眩むやうな思ひをしたものであらう。わたくしどもは今日、近代の苛烈慘絶な戰さに初陣をしてゐるのである。一度や二度は眼の眩む思ひをすることもあらう。しかしこれも心の修養である。

この前の警戒警報が發令された時であつた。午後六時の發令から日が暮れるまで一時間餘りの時間しかない。生憎、たゞ一人の女中は親の病氣で歸鄉し、わたくし一人であつた。日の暮れぬ中に用水の水を掬み、雨戸を締め、持ち出すべき荷物を整備し、せめて一日分の食糧をこしらへて置かねばならぬ。わたくしは薪を拾ひ集め、七輪の火を焚きつけながら防空の準備に取りかゝつた。だだツ廣い家の中にたゞひとり不自由な手足を鞭打つやうにして働いてゐるものゝ、ともすれば暗い心にもなるのであつた。不審げに主人の顏をながめてゐる犬もさびしさうである。その時近所の警防團の人が、すでに鐵兜に身を堅めて、臺所口に訪ねて來て「準備はできましたか。しつかりやりませう」と言つて、何の屈托もなささうな顏をして歸つて行つた。かれは勇躍して持場へ急いで行つた。

わたくしはその警防團員の姿に接した時、俄かに明かるい光りを見出したやうな氣がした。同時に、かりそめにも先刻暗い心に陷らうとしてゐた自分の心を恥ぢないわけにはゆかなかつた。

もし敵機が來たら勇躍して自分自分の立場を守る。勇躍して守る。このこゝろがけが初陣の人にとつて一番肝要なことゝ思はれる。

×

今朝は裏の畑で馬鈴薯を掘つた。肥料がなかつたので、竹山の堆肥だけにし、草だけはわたくしの仕事にして、よく搔つた。そのせいか乏しいながらも幾分の助けにはなれさうな收穫である。畑をしてゐると時間が惜しい。人と一時間か二時間の談話に費す時間を、畑の仕事に廻したら相當に畑の草搔りはできる。たいていの人は草搔りを嫌ふ。しかしわたくしはこのごろ手や足が惡くなつたためか、草搔りが一番面白い。何も考へず、何も思はず默々として草を搔つてゐると、日の暮れるのも忘れる。草を搔つてゐる

間、自然の大きな懐に手を觸れて、自然の聲を聽くことができるやうな氣がする。

草を搖らなければ收穫があがらないといふ考があつて、畑に入るのであらうが、いざ草を搖りはじめると、そんな考へはなくなつてしまふ。草を搖つた後に、伸び伸びと、嬉々として、葉をひろげ、蔓を張つてゐる甘藷を見るのが樂しいからである大きくなれ思ふ存分日光を浴びよと言つてやりたいために草を搖るのである。

褒狀
法然上人鑽仰會員一同
支那事變ニ關シ其ノ財ヲ
寄附ス仍テ褒章條例ニ
據リ之ヲ表彰セラル
昭和十四年十月七日
賞勲局總裁子爵一條實孝

二三日前から蜩が鳴き初めた。七月初旬すでに秋のやうな風が吹いてゐる。自然はいつもかはらず靜かである。

しかしわたくしたちの生活は、今こそ乾坤一擲の大勇猛心を湧き立たせなければならぬ時となつた。

奈良の佛樣を拜んでも、法隆寺の塔を眺めても日本民族といふものはすばらしい民族だと思ふ。一碗の茶に天地の幽玄を味索することのできる民族は、世界の何處にもない。このありがたい民族は永遠に生きなければならぬ。敵米英の文化の低劣さを思ふにつけても、わが日本民族は永遠に生存しなければならぬ。全人類の希望を荷うてわれ等は起つてゐるのである。

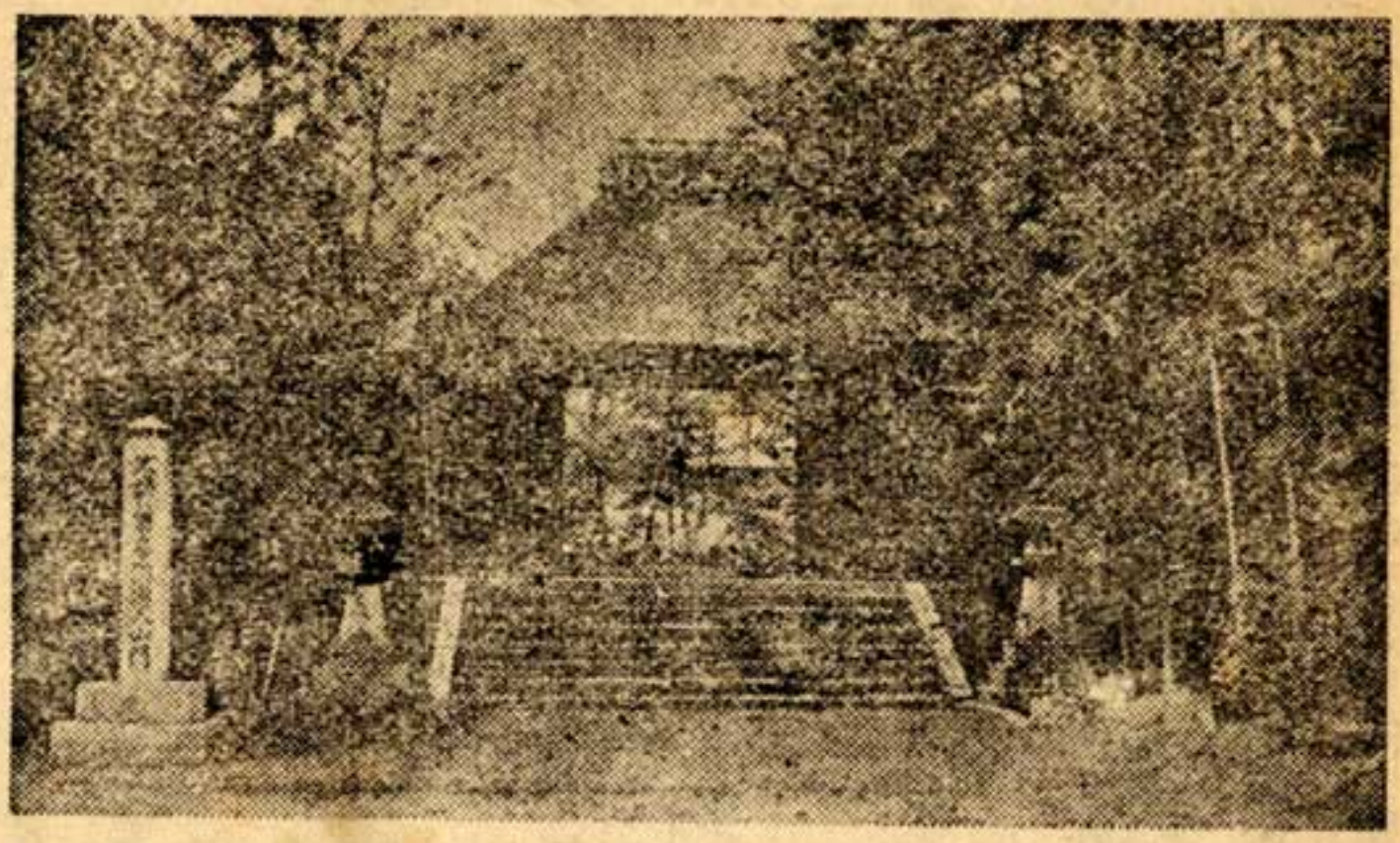
今は苦戰の時である。まだ〳〵苦戰の時はつゞくであらう。しかし、苦戰の時であればこそ人間の眞の價値が發揮されるのである。澁柿が世に出なければならぬ時である。

昔蔚山城の戰ひのをり、兵糧絶え、血水を飲んで日本からの援軍を待ちわびた家來共は「味方は三千、敵は數十萬」といつて不安がつた。その時加藤清正は「味方の三千に加藤肥後守が名を加へよ。然らば百萬にも相當するであらう」と言つた。まことに清正一人の力は百萬人にも相當した。

今日こそ日本人の一人一人が百人千人に相當するだけの精神力を奮ひ立たせなければならぬ時である。

法然院

齋藤弔花



一

「白川に居ります」と云へば「あ、さうですか法然院の傍ですか」と木魂にひびくやうによく人がいふ。それほど、法然院は白川に親しい名刹である。

白川の水が、くの字なりに東山の麓を流れてゐる。その岸に住んでゐる「洛味」の宮崎君の二階から見ると、白川の流は細く、木の下をくぐつて、疏水に入り、又の字を形ずくつて、斜めに本白川に合流する。

橋本關雪さんの大きな邸の前を爪先上りに、つき當りが銀閣寺で、足利氏の豪華をほこる西山の金閣寺と對照して、こゝは幽雅な一廓、沖山をつくつて、月待山の秋の宵に、銀沙を雪となぞらへた善政の工は寧ろ寺といふ觀念より遠く茶室式數奇に流れてゐる。

庭の按排も、泉州流とはどかく泉石のたゝずまいが、今様式で淺く見へる。それよりもその山一つ南に越した藪の奥深い法然院の方がどんなに寺らしいか。

いふまでもなく、法然上人に由緒のあるこの古刹は、盛砂に書く波の筬目も清らで、本堂前の古池は、蛙飛込む水の音をしのばるゝ。深く淀んで、そこにそこはかの河骨の葉が汀にちらほら、黄色い花を滴へてゐる風情はよい。苔は、

二

よく晴れた初秋のある日、内住の四十ばかりの眉根やさしい額の白い物柔らかな婦人が、默つて、しやがみ腰に伏目になつて、一心に雑根を苔の座より抽いてゐるのを私はじつとお寺の縁側に腰かけて見てゐた。

寺の茅葺の門前の藪には、一年中、いつでも鶯が鳴いてゐる。渡り鳥の名所比叡麓のこの野鳥林帶にありては、いろ〳〵の鳥の音がする。かけすが時々、四邊のしづけさを破つて啼く。あちでもこちでも、野頬白が囀つてゐる。鶯が啼いてゐる。四十雀、小雀が美しい羽を光らして飛交ふ梢に、のどかに囀る日白の聲は甲高

俳壇

太田耳動子選

北海道傷痍　伊達　石雄
船橋に登りて春を惜みけり
高知縣　平野　藤城
よき日和待つてもをれず麥を刈る
島根縣　林　良碩
早乙女の背には名だたる三瓶山
東京都　坂口　康夫
蛙鳴き朝霧の風清々し
岩國市　長岡白朝居
持ち込める荷より走れる守宮かな
名古屋市　熊澤　秀國
表より裏口多き花菖蒲
薬陵島　小谷　孤舟
雪道を登りつめたる茶店かな
三重縣　澤　赤峰
川開き商店街は早仕舞
比島派遣　福島　統
ドラム罐風呂に芒のはてしなし
京都市　澤井　弘陽
桐咲くや冠木ご門の奥深く
奉天市　川原　賢正
榮え行く秋に葬えて彌陀の聲
朝鮮　三浦砂千子
短夜を親しき友と居たりけり
名古屋市　掘場　典雄
はすかいに減る蠟燭や花吹雪
高岡市　内山　僊堂
モートルの響かそけく明け易き
北海道傷痍　高島喜八郎
盲人の花を仰ぎて歩みけり
高知縣　竹原　敬國
藤の花淵を覆ひて吹かれをり
北海道　山下　青
たくましさ夕べの光を踏む耕馬
北海道傷痍　渡邊　忠義
洒動會みにゆく左右の青田かな
館山市　小宮　蒲柳
茄子苗の新葉も莖も紫紺かな
神戸市　神山　榮三
御へんろのおひに蒙のつまれあり
高知縣　横山　亮國
茶摘女の苗守を頼み來りけり
泰派遣　高里　順
椰子にたく蚊遣故郷に續くなり
岡谷市　久保田　穣
堤草に絆を點じたるしどみかな
青森縣　丸尾　傳山
勞働の汗の冷えたる茂かな
投句は官製ハガキにて俳壇係宛へ

く聞へる。

いかにもその和響樂が、上人の心を悅ばせたことと想はれる。自がじゝの姿を、誰憚らずのびやかに自然の中にとけ入れて行くところに、淨土の名にふさはしい寂かさがある。

三

この法然院は、亡き内藤湖南博士も好きだつた。考古學の濱田青陵博士もこの上の墓地に鎭まつてゐる。二人の仲のよい博士は、慎ましくこの法然院の山ふところに、在りし世の靜かな生活そのまゝの心持を見せた石碑の下に永遠の休息に入つてゐる。

歌人川田順氏夫人の美しき面影と優しき詩情を寄せた京の春秋をこゝにこの法然院のあたりに花も月も憧れの的となつてゐたことはその亡き魂を慰むべく、川田氏がこゝにその香魂を埋めて、自からも、その墓近き北白川の住居に老を送りつゝあるその風懷も偲ばるゝ。

法然院は、私の朝の徜徉の區域にある。生垣に朝顏絡む濃紫、眞紅の色も目に彩の夏の朝など、ことに朝鳥の昔も眠やかに、裳にかゝる露蹈みて、閑とした幽寂境をひとりわが影見つゝ散歩する時、初めて京の靜かさ、よさを思はせる。

月の夜、私は、ひとり、東の窓を開いて、法然院の森のあたりから、麥の香匂ひ來る時など、梟の聲の絶間に、ほととぎすの啼く音に耳を澄ますのである。

その圓みと溫か味と、云ひ知れぬやさし味こそ、法然上人その人の法容もかくこそと慕はしい心一つが氣にも骨にも浸み渡るのである。

（カットは法然院山門）

ためた力だ、今こそ發揮
逃がすな時を、今こそ一丸

紀南竹枝 併序

佐藤春夫

この間、新聞で女子漁撈隊が挺身の記事を見た晩、郷里の海村の近況などに思を馳せて、熊野地方俚俗の語でこの曲を作つてみた。紀南竹枝などと題は尤もらしいが、何さ串本ぶしの化けたのぢやかのし一燦を得たら幸である。

わしのしらさん*1
輸送船のごよう
あとはたのむと
出やつたがのう*2

あぜの代りに*3
かつををつれば
かぜのみなみも
なつかしう無うてか*4

だるま

▽荒鷲のおもかげ△

成田有恒

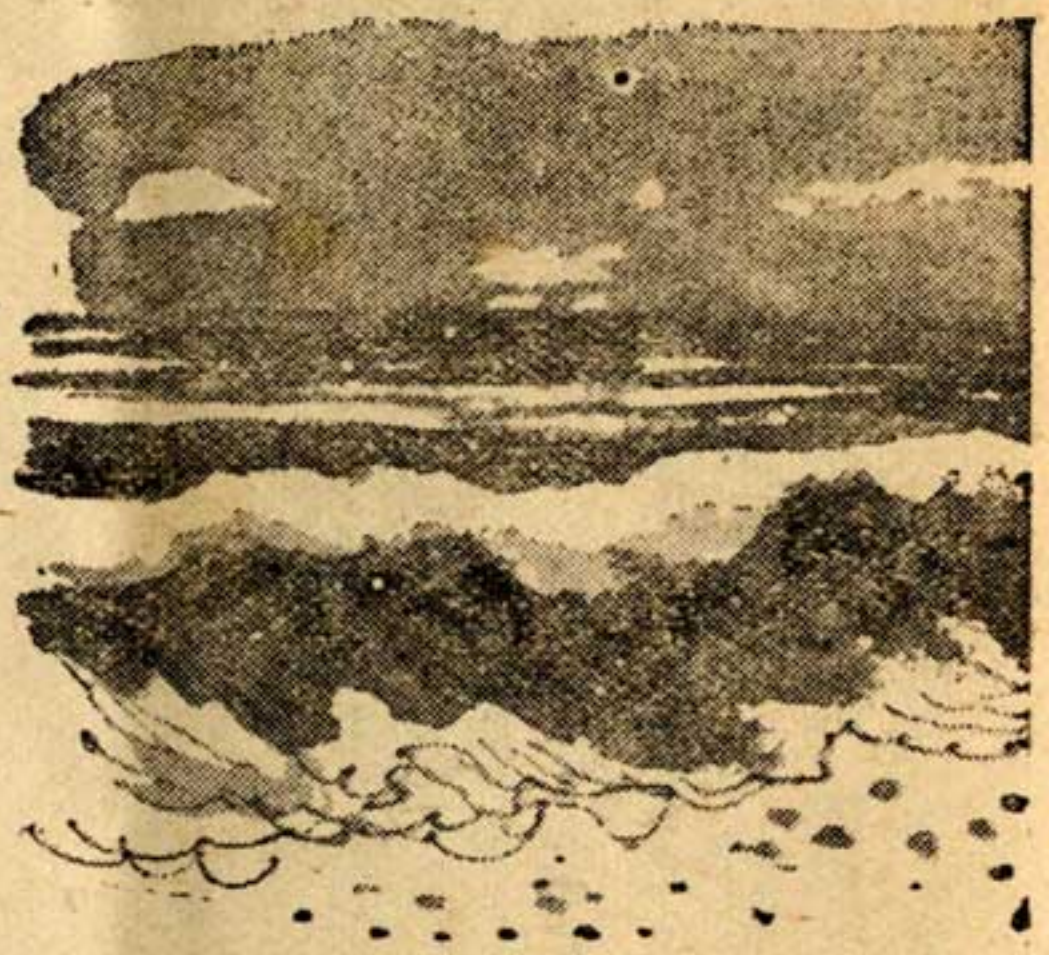
だるまは幼い日肩を竝べた竹馬の友であつた。無論これはあだ名で、彼が先生から指名されて立つ時、さつと顔を火だるまのやうにあからめるところから、僕達惡友が殘酷にもたてまつつた名で、しかも適切な愛稱でもあつた。

それでも溫和な彼は、呼ばれゝば氣輕に微笑みながら返事をした。そのだるまが、中學を出てから豫科練に入つたまでは判つてゐたが、その後は杳として消息を斷つてしまつた。忙しさにいつか忘れてしまつてゐた僕達の前に、全く突然、少しも變らぬ姿を現したのは一昨年の十二月のことであつた。紺絣の筒つぽで例によりおづおづした恰好もなつかしかつた。何はなくとも有り合せの卓を圍んでの話が、それからそれへとはずんでいつた。

彼の語るところによると、豫科練から前線へ、一年餘りに亙つてマーシャル、ウエーキと各地に轉戰し、夏頃の新聞に潛艦擊沈の華

日やけ潮かぜ
構はんけども
せめてしよらさんや、*1
さらはんほどに

色は黒うても
心やあかい
ほめてくだんせ
見違へん勿のよ、*2



*1 愛人の意、語源は知らず。
*2 「出やつた」は「出かけられた」といふ程の意「のう」は慣用の語尾
*3 あぜ、人を慣れ親しみ又は罵る時の第二人稱、古語「吾兄背」の轉か。
*4 無つてか愛慕の惑、「豈……無からざらんや」
*5 「や」は主格を表はす語、「は」「が」などの如き意、次の聯の「心やあかい」も亦これである。
*6 「な」打消の語尾に「のよ」の女性慣用の語尾をそへたもの。一句は「お見ちがへくださいますな」の意

々しい戦果の詳報が載つたのも、實は彼がうちたてた輝く武勲であつたと知つた。時刻も大分過ぎて、歸り座に移る頃になつて彼は思ひ出したやうに袂をさぐり珠數を取出して見せた。

「ずつとこれを持つてゐるんだよ。空を飛んでゐる時、ズボンのポケットの中でじつとこれを握りしめてゐると、まるで阿母の手をにつてゐるやうだよ」

と語る彼は、かつて昔教室でみた姿そのまゝにまつかな顔をしてゐた。如何にも恥しさうであつた。

その夜だるまは去つてから遂に再び現れなかつた。戦暦によると昨年七月南太平洋の敵艦を攻撃して自爆したとのことである。僕は今彼の最後の姿をひそかに頭に描いてゐる。眞赤に燃える愛機の中で、いよ／＼敵艦目がけて自爆を決意した時、しつかとポケットの珠數を握りしめてゐたことだらう。そして決然たる彼の覺悟が、だるまのやうにまつかになつた表情に炎となつて燃えてゐたことだらう。恥らひは美しい姿勢である。そしてそれがつゝましさへの努力であればある程、尚いのではなからうか。

ラマ教の明日

蒙古のラマ寺（下）

貴司山治

私は蒙古奥地を旅行して、蒙古人とラマ教の關係を考へた。

日本本州と朝鮮を合せたくらゐ廣い今の蒙古自治邦領内に、蒙古人の數は十萬内外しかゐないといはれてゐる。しかもそのうちの二萬人までがラマである。割合からいへばラマの數は全國民の二割を占めるのだから、一億の日本に二千萬人の坊さんをつくつたのと同じことになる。いかに考へても、これでは割合が過剰である。

僧侶は宗教のことを司り、生産には從事しないのだから、その數の割合が過剰になつては、國家の生産力に影響する。にもかかはらず、なぜ蒙古にはラマの數が過大な數を占めてゐるのだらうか？その原因をさぐるのには、蒙古人の生産の基礎を直視しなければならない。

蒙古草原はさきにいふとほり、農耕の營める黄土地帶ではなく、ほとんど農耕不可能なゴビ地帶である。そのうち雨量の割合に多い地域が草原となる。しかし、草原の草の生態をよくみると、根がむやみに深く、葉や莖は短く、分布狀態は粗生である。決して日本内地の平地草原と同じものではない。もしここに羊を追ひこんで牧畜を行ふ場合には、何萬頭といふたくさんな羊を養ふのには、豫想外に過大な面積を要する。草がまばらだからである。昔から蒙古草原には、約百五十萬頭の羊がゐると報告されてゐるが、この數は現在にいたるまであまりかはらないといふのは、さしもに廣い蒙古草原であつても、大體羊を養へる總數量にかうした自然の制限があることを感じさせる。

そして、蒙古人の唯一の生産業は牧羊業である。蒙古人は羊によつて命をつないでゐる民族である。百五十萬頭の羊によつて命をつなぎうる蒙古人の數はきまつてゐて、人口がふえては生産の基礎が破壞される。——食ふものがなくなる。そのために過剰人口をラマ寺に入れて、妻帶を禁じる。

これがラマの數の過大な何よりの原因でなければならない。蒙古社會におけるラマ寺とその僧侶の存在は、必然的なものである。

各地のラマ寺には、大體二三百人のラマがをり、貝子廟などはもとは三千人、今でも千八百人のラマがゐる。有名な百靈廟や三德廟などは、寺そのものが草原の中に蜿蜒とひろがつた一大都市を形づくつてゐる。

これらのラマ寺の構成は、本堂を中心に何百何千といふラマの住む住宅が密集し、菜園、牧場、機織場、その他寺自身が自給自足

を營むための設備も備はつてゐる。

同時に大勢のラマたちは、みんなが單に一樣に念佛勤行に暮してゐるのではなく、ラマ醫となつて旗民の診療にしたがふ上級の者から、大工、左官、百姓、炊事夫、羊飼ひ、傳騎（使ひ走り）糞夫にいたるまで、宛然たる一社會の縮圖をなしてゐる。決して單なる寺と思つてはならないのである。

ラマの中には、寺にはいつてほとんど讀經もせず、百姓仕事ばかりしてゐる者や、炊事夫で暮してゐる者等々、たださへ智能のおくれたかれらの社會で、かうした下級ラマになると、全くの原始人である。しかも何千人ゐても妻帶は許されない。これらの智能の低級な大勢のラマたちが、そのために諸種の弊害をかもしだすことは、むしろ當然の結果である。ラマが亂倫者だといふ非難は、實際をよくみて、なぜ亂倫になるかを知らなければならない。

3

自治邦政府の成立以來、ラマ改善の對策が講ぜられてゐる。私は張家口で一と晩中、岩崎公使から蒙古施政の全般をきいたが、その時の話では、まづかういふのである。

第一に過大なラマの數を整理して、できるだけかれらを還俗させて生產にしたがはせること。そのためにこの一、二年來ラマに對して試驗制度を課し、讀經のできない者、蒙古文の讀めない者をふるひおとし、戒律を破つた者を懲罰還俗させる等の對策を講じてゐる。かうして質のいいラマをのこし、かれらには寺內で國民教育を施し、又生產技術を教へる。

還俗させた所謂不良ラマはこれを保護して、適當に生產面に就かせ、妻帶させてゐるが、同時に生產面に送りこまれる人員を受け容れうるやうに、生產機構を擴張したり、改善する必要が生ずる。

そのためには、第一に今まで肉だけ採れて毛の採れなかつた蒙古羊を改良して、肉とともに毛の採れる種類につくりなほしてゐる。採れた毛を用ゐて羊毛生產の工業をおこす施設と、その技術を蒙古人一般にあたへるとともに、還俗ラマをもこれに振り向ける。

又羊の數をふやすためには牧草の改良と增植をはかる仕事、牧羊以外の生產をおこすために草原の農耕を實施させる等々、蒙古社會の全般的な新建設の進展の中で、ラマ改善の方策を講じる道が今やひらかれたのである。

4

ラマ教は、ラマ教などと俗にいはれてゐるが、もともと佛教それ自身であつて、高野山などと同じ密教の一派である。

さういふ方面のことについては、宗教界に專門家がをられて、私が詳しく說明する必要はあるまいと思ふが、蒙古政府ではラマ教を

内外から刷新改善して、本來の堅實な佛教精神に復し、蒙古人の精神生活の支柱たらしめようとはかつてゐる。

實際茫漠千里の大草原を旅して感ずるのだが、行けども行けども草と丘ばかり、一日中歩いて、地平線には何物もあらはれないやうなのが蒙古の國である。ここを旅行するのはまるで小舟で太平洋を漕いでゐるやうな感じである。

何日もの航海のあげく、やうやくかなたの砂丘の上に白いオボのならぶのがみえてくる。オボとは蒙古人が天神地祇を祀る祭壇である。石で丘の上に丸く築きあげたトーチカ型の上に枯枝をさし、棒を立ててある。

そのオボに招かれて近づけば、盆地の山ふところに黄金色の屋根を夕日に光らせてゐるラマ寺がみえる。何の信仰もない私のやうな者でも妙に涙ぐましくなつて、ラマ寺の屋根をみた時には、ありがたいやうな、なつかしい思ひに心がかき立てられる。もし草原の中にラマ寺がなかつたら、蒙古人の心はおよそ歸するところもない荒れはてたものになつてしまふであらう。

寺にはいつて一夜の宿を請へば、大勢のラマがゐて勤行の喇叭や太鼓の音は朝に夕に鳴りひびき、あまつさへ本尊の活きた阿彌陀如來を禮拜して、阿彌陀如來から無病息災の手厚い祝福をさへ受けることができるのだ。

健全な意味においてラマ寺の存在は、蒙古人に取つては心の糧であり、精神の據りどころである。かれらのために、荒れはて、汚れすたれかけてゐるその心の住處を、洗ひ淨めてやることが大切なのである。（了）

寫眞は貝子廟の長老……同寺院内庭にて

（貝子廟活佛は敵地區に赴き抑留されてゐて不在）

◇勇猛心の振起……◇

底力は信仰に裏づけられて強し

驕れる敵は遂に本土の門戸まで押し寄せてきた。サイパン全員戰死の報を涙なくして聞いたものがあらうか。三千の勇士は自決して最後の突撃をたすけた。これら將兵の悲憤の聲が海を渡つて南から響いてくる。

盟邦滿洲國を初め中華民國、泰國、ビルマ、比島の人達は目をこらして盟主日本の奮戰を見守つてゐる。南方共榮圏の住民たちは日本の闘ひの成果を祈つてゐる。申すまでもなく東洋近世史は東洋諸國の分離孤立と、そのすきを狙つての侵略であつた。かくてはわれ等諸民族が結局滅びる外ないと奮然立ちあがつたのである。

しかして今や東亞興廢の關頭に立つてゐる。石にかじりついてもといふ言葉の今ほどぴつたり來る時はない。骨を切るため肉を切らせる覺悟の今ほど大切なことはない。われわれが總ゆる方面で孜々と築きあげた國力は、今この時に發揮せんがための努力であつた。蓄へられた底力が一擧にして現し得ないなら何の力ぞと云ひたい。苦境にたてばたつ程ますます反撥し、力の盛り上つてくるところに眞の力がある。

ただしほんとの力は肉體だけから出てくるものでない。一時だけの力なら或ひは小勇を以てしても出し得るだらう。渾身の力を發揮するのも、一日一月で止つてしまふ力では大勇とはいへない。撓まざるこの努力よ、けだし信仰に裏付けられた勇猛心なくしてはあり得ない。これは歴史の上で明瞭に知られることである。われわれはわれわれの祖先に對し又子孫に對して申譯の出來ないやうなことつないやう、大勇猛心を發揮し敵米英に思ひ知らせてやるのは今である。

信仰相談

四箇格言

（問）先般或る所で日蓮の「念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊」と言ふ四箇格言のお話を聞きましたが、全く獨り天下で他を惡し樣に申しまして、いさゝか聞いて居られませんでした。他の惡口を言はねば自分の偉さが認められない氣持も氣の毒ですが、かゝることをこのまゝ捨てゝ置かずに、かう云ふ對手にはそれに相應しい反擊方法を採るべきではないかと思ひます。

（東京・向島・大場綠郎）

（答）今でもそんなことを言つて居る人があらうとは驚きましたが、それは屹度田舍の井蛙的な人物か、非常識の俗信仰家か、學問のない盲滅法の人かであつて、全く相手として取るに足らぬものと思ひます。よく「蚤取り眼」と云つて蚤を取つて居る人が眞劍になつて蚤を探して居る姿を批評しますが、これは蚤と同列になつて蚤と相撲を取つて居ることになるのであります。今の問題も畢竟それと同一であつて、實に馬鹿々々しくお話にならぬのではないでせうか。成程默つて居れば圖にのることではありませうが、圖にのつたところで大したことはないではありませんか。畢竟形式論ではないですか。日蓮聖人の「立正安國論」にしたつて餘りパッとした理論內容がないやうに思ひます。唯「法華經を信じなければ必ず他國から侵逼されるぞ」と云ふだけのことで「それ故にこそ法華を雜行なりと捨てた法然のともがらや念佛の敎は抹殺すべし」と云ふのであります。つまり「法華經は正であるから法華經を興隆すれば我が國は他國から犯される憂ひがない。故に安國となる」と言ふのに過ぎないのですが、今時こんなことを信ずる人もないでせうし、畢竟廣告心理に過ぎないと思ひます。

有閑時代にはさう云ふことをあげつらうのも一興ではあつたでせうが、この一億一心何處までも米英を擊滅しなければならぬ時に當つてそんなことを言つて居たら誰も相手にする人はないでせう。大體法華や天台の圓融思想は理論好きな支那思想の粹でありますから理論としては中々勝れて居りませうが、實踐的には夢の夢であつて問題にはなりませんし、第一日本精神に一致しない點があるのであります。またその佛土論にしても「常寂光土」とは言葉ではハッキリ言へない抽象のもののやうに思はれますが、具體的にハッキリ言へないところに佛土論としてはまだ理論以上のものではないとも言へるのであり、隨つて日本國體とは性格の異るものがあると言へるのであります。

これらはもつと日本的に發展せねばなりませんでせう。近時各宗共に皇國佛敎の研究を一生懸命にやつて居りますが、更にはまた各宗の有志が集つて皇國佛敎學會なるものを興さうとして居ります。私もその中の一人に加盟して居ります。日蓮宗、眞宗、臨濟宗曹洞宗、其他在俗の佛敎學者も加入して居り、お互ひに眞の皇國佛敎を研究しやうと努めて居るのであります。

もう他宗のことを攻擊する時代ではないでせう。心ある人はその攻擊をきけば顏を橫にそむけることでせう。大人氣ないと云ふよりもうそう云ふ理論鬪爭の時代ではないのであります。そんな偏狹なことでは大東亞の新秩序は建設されません。自分のものは何でもよく他のものは何でも惡いと云ふやうな考へでは、結局人はついて來ませんでせう。（中村辨康振當）

遺族感話

涙の蕾

金田明進

私の町のはづれの辻角に、さゝやかな子供あひての玩具屋さんがあつて、肥つたおそめさんと云ふ獨身者の婦人が、最近若い妹のやうな人と住んでゐました。この家はおそめさんと弟の昇三さんと二人きりの家でしたが、昇三さんが再度の出征で出てゆかれたあと、昇三さんの結婚の式をあげるばかりに緣の結ばれたお千代さんが、この義姉のおそめさんを助けて共同の生活をしてゐました。おそめさんは兩親を失つてから幼い弟の昇三さんを親に代つて育て、つひ自分の婚期も失つて、四十歳を過ぎるまで獨身でゐたのです。

ところが先日突如として昇三さんが南太平洋で戰死をされたといふ內報がありました。弟の歸りを唯一の樂しみにしてゐたおそめさんと、許婚のお千代さんの驚きは他で見る目もいたましいものでした。しかし東京から大工さんであるお千代さんのお父さんが馳けつけて祭壇のかざり付けやら諸般の手續きやら、なにくれとなく世話をして、おそめさんを慰めてくれました。

ところが、この內報があつてから半月ほど經つて、この一人の姉のおそめさんも狹心症でタッタ一晩で亡くなりました。そしてこの英靈の家には、まだ田舍生活になれない東京育ちのお千代さん一人きりになり、これからどうして行つてよいか、途方にもくれたことでせう。しかし、お千代さんのお父さんがこの重ねて來つた不幸の中によく英靈をまもり姉おそめさんの葬式も無事すませました。

ふだんはあまり親しくしなかつた親戚も、かうした事情から寄り合つて、この英靈の家をどうして今後まもつてゆくか相談が始まりました。私はおそめさんの葬式のあとで、お千代さん父子と親戚の人々の居る席で「どうぞこの昇三さんの英靈をおそめさんに代つて、立派にお

まもり出來るやう緣者の方々で御相談下さい。この家は姉弟二人とも亡くなられ、土地なれぬ許婚ひとりとなりましたが、よく世間できくやうに軍人遺族として、英靈をめぐつていまはしいことの起らぬやう、どこまでも名譽ある英靈の家の立ちゆくやうに皆さまでお取計らひ下さい。それが昇三さんの英靈に對し、また亡き姉のおそめさんに對する唯一の供養です」とお話しました。

二三日すると、この家の最も近い親戚にあたる男の人が二人ほど私方へ參りまして、「實は昇三の家も姉がつゞいて亡くなり、まことにこまつた事になりました、只今では許婚のお千代さん父子がよく世話をしてくれてゐますが、お千代さんとて未だ入籍もしてゐない人です。英靈のためには若い身ぞらに氣の毒なほどよく仕へてくれてゐます。しかし、田舍の親戚としてはこの齋藤家はどこまでも血緣ある親戚から相續人を出したい、ついてはあのお千代さん父子に誠にお氣の毒ですが、あの家を出て貰ふやう話をして頂きたい。勿論英靈とは深い緣のあつた人ですから、英靈に對する御下賜の思召などは葬儀費用を除いてはすべてお千代さんの方に差上げるやうに致します、……」

私は翌日、英靈の祭壇と、も一つ白木の位牌の並んでまつつてあるこの不幸な家に、お千代さん父子を訪ねて親戚の意向を傳へました。

昇三さん再度出征後まもなく東京からこの田舍町に移つて義姉と共同の生活をはじめ、東京の工場に通勤して挺身の乙女となり、このごろは疎開に協力するためにもと澤山の荷物も移送し、ひたすら昇三さんの無事歸還を義姉と共に待つてゐた純情の乙女、お千代さんにとつて、この英靈の家を去れ、この親しかりし義姉の家を去れとはどんなに無情に聞えたことであらう

しかし私は、お千代さんに申しました。「この重なつた不幸の中に立つてあなたの素直なお心が一番大切です。英靈をまもることは、形の上ではこの家の相續人となつた誰かゞするでせう。だが溫かい誠のこもつた心で英靈をおまもり出來るのは貴女が第一番です。すべての形をとり去つたあとに殘る心は貴女より他に持つことは出來ないでせう。親戚の方々も、貴女に對してどこまでも今後親戚同樣のおつきあひをしたい、と申します。たゞ、今の親戚たちの相談で、この家を血つゞきの者で相續したいと申すのです。心よくうけ入れて、この家を去つて、ほんとうの昇三さんの英靈をお迎へ下さい。明日は昇三さんの百ケ日でもあり、姉さんの初七日でもあります。親戚の人々と共に、二つの靈前でお念佛をつとめて心よくお別れ下さい：：」と。お千代さんとその父はだまつて頷いて聞き入れてゐたが、たまりかねてお千代さんは泣き出しました。

切ないことでせう。辛いことでせう。しかしその父は申しました。「お話はよくわかりました。お千代にとつて、こんな尊い試練はないでせう、おそらく、お千代の生涯はこの尊い不幸によつて淨められることでせう。明後日は早速荷物をまとめて東京の家へひきとります。お千代もこの覺悟はとうからして居りました。」と言葉少なに語つた父の眼にも涙が光つてゐた。お千代さんは遂に聲を立てゝ靈前に泣き伏したのでした。それは、たゞたゞ英靈と義姉の靈に誓ふ尊い乙女のまごころの表はれであつたのです

その翌日、私はお別れの靈前回向に參りました。お千代さん父子と田舍の親戚と居列んで、共にお念佛、讀經をしました。お千代さんは悲しい涙の中に、おつとめ後、なにくれとなく參列者へのもてなしをしてゐました。私はこの席で「英靈を圍む方々が心から英靈中心にこの齋藤家をまもり行くため今後とも美しい態度で譽ある遺族としての面目を保持するやうに、今日この靈前でお念佛を申しお燒香を捧げた心持ちを相續して頂きたい：：」とお話申しました。

この翌日、お千代さん父子は涙の中に白い祭壇のある辻角の家を引き拂ひました。そして隣村の農家である親戚の老母が、祭壇をまもるべくこの家へ引きうつりました。

いま、若き勇士はどれだけ戰場に懸命な奮鬪をつゞけて居ることでせう。そしてそのかげに、どれだけ多くの若き女性がその勇士に誓つて、挺身の誠をつくしてゐることでせう。しかも、輝く若き日の希望を、お千代さんのやうに悲しみの中に捧げて、日本女性としての、しとやかな、けなげな、そして固き覺悟を以て、英靈へ應へる道をつゝましく辿つてゐる若き女性の多きことを思ひます。

「その後お千代さんがどうかお念佛の道によつて蕾の涙の中から新しい希望への生活を咲きえめてもらひたい」と私は願つて居ります。

増産だ、自分一人で増産だ
何糞と、頑張れ、増産
この腕で

支那人の一斷面

岩野喜久代

北京に遊學させてある娘が特折り支那人の生活ぶりを報告してくる。彼女が親しくしてゐるのは清朝の皇族の娘と、それから現在お世話になつてゐる家の老門番子で、云はば最高の貴族と最低の庶民と兩方の生活の著しい相違を見聞してゐるわけである。その中で私が最も注意と興味をもつて讀むのは、後者の生活である。それは支那四億民の大多數を占めてゐるものの生活態度だからである。娘は云ふ。

門番の老頭兒の生活を見てゐるとその簡單さに驚きます。二疊位の部屋にあるものはアンペラの寢臺一つ小卓一箇、その卓はいろ〳〵の用をします。或時は白菜や葱を刻む俎の役をし、食事時は食卓になり夜は紅樓夢をよむ文机になります。彼は感心に字が讀めるのです。それから椅子三箇鐵鍋と庖丁一つづつ、布團と云へばまんとうの皮のやうに薄いのが二枚きりで、寢卷を持たぬ彼は冬でも上半身、裸で寢ます。食事は一日二回でうどん粉をこねて蒸したまんとうを一回に二箇と野菜スウプを添へることもあります。彼は日本人のことを食べ過ぎる國民だと始終云つてます。

私はこの手紙を微笑をもつてよんだ。支那料理と云へば油濃いもの、肉を主としたものとの觀念が日本人の頭にはしみついてゐるらしいが、料理屋や中流以上の家庭をのぞいて、一般庶民の食生活はこんなにも簡素で、しかも小食なのである。日本人は大食ひだと評した門番子の言葉に親しい微笑と共に、戰時下の困窮比べに耐乏力に、油斷のならない相手だと云ふ氣がする。曾つて私は華人苦力が一椀の高粱粥をすすりながら、あの根氣と勤勞意欲の旺盛さにびつくりしたことがあつた。

この頃、誰に逢つても不足の話ばかりでつづく聞き飽きて憂うつになつてゐる私に、朗かな話題が飛びこんだ。それは或る支那通の人が地方へ旅したところ、この頃の交通不便さに祟られて、二里ばかり歩かねばならなくなつた。折から雨が降り泥濘となつたが先生は一言の不平も云はず平氣の平左であつた。やがて停車場につくと切符が買へない。止むなく木賃宿に泊つたが、宿泊の豫定でなかつたので、洗面道具もタオルも持たない。翌朝つれの者がひどい眼にあつた、先生はどうして顏を拭きましたかときいたところ、「支那人のやうに顏を洗ひつ放しにして上を向いてゐればお天とうさまが自然に乾してくれるよ」と云つて濟ましてゐたと云ふ。その人が私に面白い支那の風物を話して呉れた中で「或驛で實に美味さうな柿を買つて車中の支那人が喰つてるので自分も一籠買つて剝いて一口嚙んでびつくりした。それは色は美しいが猛烈な澁柿なのだ。自分がそのまま放つて置くと前席の支那人が食べないなら呉れと云ふからやると、實にうまさうにかぶりついて平げてゐる。日本人のやうに皮をむいたりするものは一人もない。餘すところは種子とへただけだ私はそれを見て支那人の味覺に對する旺盛な抱擁力に舌を捲いてしまつた。こんな民族を相手にするのは大變だと思つた」と云ふ話が注意をひいた。大東亞戰爭は支那事變に始り支那事變處理に終るとは誰しも云ふところで、その相手のこの太い強い神經を了解するものは甚だ尠い

一切を委せて不安なし

——法然上人法語解説（其三十二）——

中村辨一康

法語

念佛を信じて往生を願ふ人は殊更に惡魔を拂はんが爲に萬の佛神に祈りもし、愼しみをもする事は、なじかはあるべき。況んや佛に歸し法に歸し僧に歸する人には、一切の神王、恒沙の鬼神も眷屬として常に此の人を護り賜ふと云へり。然ればかくの如きの諸佛諸神、圍繞して護り給はん上はまた何れの佛神かありて惱ましさまたぐること有らん

また宿業限りありて受くべからん病は如何なる諸の佛かみに祈るとも、それによるまじきことなり。祈るに依りて病もやみ命も延ぶることあらば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん。況んやまた佛のおんちからは念佛を信ずるものをば轉重輕受と言ひて宿業限りありて重く受くべき病を輕く受けさせ給ふ。況んや非業を拂ひ給はんことましまさざらんや。

解說

世間に非常の勢ひで流行する宗教は大概病氣がなほるから、幸せになるからと云ふことが宣傳されるからであります。自分では「そんなことは言はぬ」と申しても、信者の人達がそれを流布して人々を誘引しますから、それをそれからそれへと聞き傳へた人々が雲の如く群集する實狀であります。

これは獨り○○教や△△△教團やモロラジーなぞに限つ

されば念佛を信ずる人は假令如何なる病を受くれども皆是れ宿業なり。之より重く受くべきに佛の御力にて之れほども受くるなりとこそは申すことなれ。

われらが惡業深重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすら遂げさせ給ふ。況してこの世に幾程ならぬ命を延べ病を助くる力ましまさざらんやと申すことなり。

〔淨土宗略抄、（法語抄一八九、一九〇、一九一、一九二）〕

たことでなく、徳川時代に於ても雨後の筍のやうに、出ては彈壓され出ては彈壓されてやがては消え去つて行つたのであります。

中には現在の宗教が「病氣をなほす」力を失つて居るのは、最早や宗教としての價値を失ひ滅亡的な衰頽を示して居るものである。釋迦にしろ基督にしろ宗教の元祖と云ふ元祖は皆な病氣をなほす力があつたのであると云つて、既成宗教を無力なりとし、自分の唱導する新宗教とそ最も現代的な力を持つものであり、最も潑剌たる新らしい力を發揮して居るものであると言つて居りましたし、信者の人達もまたさう思つて居りましたが、それも何時しかあとかたもなく消え去つてしまつたのであります。このやうに宗教と云ふものには何か必ず不思議な力があるものと思つて居る人がありますが、それは極めて原始的な幼稚な考であります。若しそれがなければ「宗教」でないと云ふならば、國家に取つてそんな宗教はなくてもよろしいのであります。否な、寧ろ無い方がよいのであります。なぜと申すならば、そんな宗教は國民を不健全の者たらしむるものだからであります。病氣をなほすには病源を除かなくてはなりません。病源を除かずして單に祈るだけで治るならば、藥も看護もいらないでせう。それが若し可能ならばそれと同じ意味に於いて業務に於ても働かずして祈りさへすればお金がもうかることにもなるわけで、隨つて御祈禱と云ふものが國中到る處にはやつてインチキな淫祠邪教はます〳〵繁昌して行き、國民は勤勞精神を失つて遂には亡びてしまひます。これ亡國思想でなくて何でありませう。

されば何か不思議の力があるべきだと考へるのは、すべて物ごとを功利的に考へるからであつて、要するに物質的自利的な米英思想に外ならないものであります。

若し祈ることに依つて病氣がなほり、お金がもうかるならば、さうした人々は死ぬこともなく丈夫であり且つ働かずしてお金持になることになるのであります。そして國民の全部が祈禱ばかりして居て働かなくなつたら、第一食糧をどうしますか。住居や衣服をどうしますか。一進も三進も行かなくなつて皆んな乾上つてしまふでせう。

西洋のお伽噺にさへ「手に觸れるもの凡てが金になる」お話があつて、結局は食ふことも出來ず着ることも出來ずすつかり困つてしまつたと言ふ話があります。それは正に「共死」の思想であり「共だほれ」の考へでありますから絶對に禁止しなければなりません。

どんな見易いことが分らないで、それを得々として語り、或はそれを有り難つて信ずる人があるに至つては全く宗教的には無智だと言はれても仕方がないでありませう。

無論「天佑を保全する」と云ふ言葉もありますが、これ

は「爲すべきを爲し爲すべからざるをやめて」出來得る限り人事をつくして天の道を「保ち全うする」ところに「天佑」があるのであつて、決して利己主義から天佑を頼むと云ふのではありません。

また「神佛が加護して下さる」と云ふ考へも、若し功利的自利的な意味ならば、さう云ふものはないと斷言してよいのでありますが、若し天地の理に契ふ人であるならば正しく「神佛も守護し玉ふ」ものと云つてよいのであります。ととに「三寶」に歸依する人は天地の理に契ふ人でありますから、明かに諸佛諸神來つてその人を護り玉ふのであります。然かも念佛は歸依三寶の究極したものですから、諸佛諸神の守護があつて然るべきものであります。

また「轉重輕受」と言ふことも有り得ることであります。若しとれが許されなければ、天地は窮屈なものとなつて人々はやり切れたものではありません。然し實際は「緣」の變化に依つて受くべきものも受けずにすむ場合もあり、重いものが輕くなる場合もあつて一樣ではありません。同じ種を同じ苗床にまいても一樣に育たぬのは私達の日常に見聞するところであります。

杉の苗木にしても松の苗木にしても何萬本も決して同じやうには育ちません。それはそれ〴〵いくらか條件が異るからであります。即ち因が同じであつても現實の果が同じと云ふ譯には行かないのであります。然らば條件次第で「轉重輕受」もその反對の「轉輕重受」もあり得るわけであります。

殊に如來様の大願業力は業力の中の最も強大なる業力であります。何となればそれは天地綜合の正義の力であるからであります。私達が念佛心に依つて天地の大道に順應するところにおのづから働いて來る天地綜合の強緣であるからであります。何んな力もとれに勝ることは出來ません。この故にこちらにこの本願の強緣を強力に受ける條件さへ備はつて居れば、病氣だつて屹度癒るに相違ありません。

とは云へそんなことを望むやうな信仰なら、それは既に功利的信仰であり物質欲的信仰であつて天地に契ひませんから、もう決してさうした利益を受くる資格がないのであります。

「他力に隨順する」とは一切を天地綜合の強緣たる本願力に打ち委せることであります。

お召しとあらば如何やうにも順はねばなりません。そこにとやかくの議論はないのであります。それとそ良寛和尚のやうに「病氣の時は病氣がよろしく候、死ぬ時は死ぬのがよろしく候」であります。ジタバタさわぐだけこちらがまだ不徹底ではないでせうか。一切をお委せするところに一切の不安はないものと信じます。

中村辨康著

新刊

信仰問答

賣價三圓十五錢
送料廿四錢

「淨土」創刊以來連載の「信仰相談」から主なもの約二百を選び系統的に配列しました。誰もが知りたい難問疑義に對し明解を與へた興味深い活きた信仰案内書です。問ふものの切實な惱みや疑ひに對して親身に懇切に指導してゐます。

郁芳管長猊下名號御執筆

淨土宗日常勤行式

須價八十五錢（送料共）
折本、縦五寸五分、横二寸五分

本文二號活字、總假名ッキ、特に一般信徒用として編纂されたもの。

發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇吉田絃二郎先生は暑さにめげず相變らず御奮闘されてゐます。

◇佐藤春夫先生から引續き玉稿を頂き深謝してゐます。「竹枝」とは地方色を帶びた唄といふ意味で、紀南は先生の故郷であります。

◇齋藤弔花先生は久しく京都に引籠つて居られますが、文筆には仲々の御精進を續けられてゐます。今後本誌にも玉稿を寄せて下さることになりました。

◇會長里見達雄先生は從來風邪一つひかぬ健康體なのに、何うしたことか微恙を得て入院しましたがこの程快癒退院されました。

◇雜誌界の企業整備は一通り終つたやうですが、本誌は職能雜誌として殘り、ます〳〵この方面で努力するやう命ぜられました。微力ながら御期待に副ふべく勉强致す心算ですが、今後とも一層の御支援をお願ひします。（む）

淨土　八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十年七月二十日印刷納本
昭和十年八月一日發行
（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人　眞野正順
東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人　赤尾光雄
東京都牛込區市ケ谷加賀町一ノ一三（東京一）
印刷所　大日本印刷株式會社
配給元
東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社
發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館內
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價　㊐金十二錢（送料二錢）
會費　金一圓六十八錢（送料共）
一ヶ年
振替拂込みはすべて十錢增のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十九年七月廿日印刷納本・昭和十九年八月一日發行

淨土　第十卷　第八號

㊐定價金十二錢（送料二錢）